

## 「生」と“料理の三角形” —意味派生の基盤をめぐる—

“NAMA” and the “Culinary Triangle”: on the basis of semantic derivation.

小 出 慶 一\*

KOIDE Keiichi

### 1. 目的 — 問題の所在

「生魚」、「生傷」、「生放送」など、「生」という要素を持つ語がある。（なお、以下、「生」という表記は「なま」という語を表すこととする。「生」を「セイ」と読む場合は注記する。）この稿では、この「生」について、次の3つのことを考える。

ひとつは、この「生」の基本的な意味は何かということである。このことを考える理由の一つは、辞書類などの一般に流布している記述の妥当性に疑問を持つからである。たとえば、手元にある辞書では次のように書かれている。

- 1 a. 「もとのままで手を加えていないもの」  
（『岩波国語辞典第二版』。以下、『岩波』）
- b. 「動植物の、煮たり、焼いたり、干したりしない状態」（『新選国語辞典第八版』）
- c. 「野菜・魚・肉などの食べ物を煮たり焼いたりしていないこと」（『明鏡国語辞典第二版』。以下、『明鏡』）
- d. 「そのものが本来の姿のままで手を加えていない状態」（『基礎日本語辞典』）

このような捉え方は妥当なのだろうか。仮に、「もとのまま」というならば、「生いか」は「い

か」と同じなのか。海で泳いでいるイカは、「生いか」なのか。また、「～していない」という記述が多いが、このような消去法的な記述で「生」の意味の核心が捉えられるのか、そんな素朴な疑問が湧いてくるのである。

二つ目は、多義的な用法を持つと思われる「生」の用法間の関係はどのようなものか、ということである。たとえば、「生魚」と「生傷」はどんな関係にあるか、ということである。「生」の用法はいくつ区別されると思われるが、それが基本義とどのような関係にあるかを検討する。

三つ目は、これらの検討をもとに、「生」の各用法の派生の基盤を考えることである。この稿では、レヴィ・ストロースの示した「料理の三角形」（レヴィ＝ストロース1980）が、「生」の意味派生の基盤になっているのではないかという仮説を述べる。この仮説が妥当ならば、用法の派生は偶然的あるいは恣意的なものではなく、予め可能な方向が用意されているということにもなる。派生は予想はできないかもしれないが、その枠組みは想定可能なのではないかということ。「生」を例に検討したい。

以上のことが、「生」について検討する本稿の目的である。

\* こいで・けいいち  
埼玉大学教養学部教授，日本語教育

## 2. 用法の概観

### 2.1 用例

ここでは、「生」の用例を、辞書類、国立国語研究所ninjalを使って収集し、さらにyahooなどから用例を追加した。

### 2.2 用法の概観

まず、「生」の用例全体について、その分布を概観しておきたい。

ここでは、「生」に続く語の意味的な性質で区分した。2に区分を示す。右側の語は、用例である。

①と②はモノで、①は食べられるモノ、②は食べられないモノである。おのおの、さらに、自然物が製造物（非自然物）かで分けた。

③～⑥はモノ以外である。

③はヒトの身体、④はヒトやモノの状態を表す形容詞、⑤と⑥はヒトやヒトの活動、および、その状態を表す語である。⑤と⑥を分けたのは、⑤は語としての1語化の度合いが高いが、それに対して、⑥は「生」の付加に生産性があり、語としての熟合度の違いがあるからである。

### 2. 「生」の用法

#### ①可食性のあるモノ

- |       |          |
|-------|----------|
| 1 自然物 | 生肉、生いか   |
| 2 製造物 | 生ハム、生パスタ |

#### ②可食性のないモノ

- |       |        |
|-------|--------|
| 1 自然物 | 生木、生竹  |
| 2 製造物 | 生コン、生鉄 |

#### ③ヒトの身体

- |      |       |
|------|-------|
| 1 身体 | 生傷、生爪 |
|------|-------|

#### ④モノやヒトの状態

- |      |          |
|------|----------|
| 1 状態 | 生ぬるい、生白い |
|------|----------|

#### ⑤ヒト、ヒトの活動（1）

- |         |         |
|---------|---------|
| 1 状態    | 生焼け、生煮え |
| 2 知識・技術 | 生兵法、生学問 |

- |      |         |
|------|---------|
| 3 ヒト | 生意気、生半可 |
|------|---------|

#### ⑥ヒト、ヒトの活動（2）

- |         |           |
|---------|-----------|
| 1 活動    | 生中継、生放送   |
| 2 活動の産物 | 生データ、生原稿  |
| 3 ヒト    | 生オバマ、生高校生 |
| 4 身体    | 生脚、生顔     |

以下、この区分に従って、それぞれの用法の性質と意味を検討する。

## 3. 可食性のあるモノの「生」（区分①）

### ——基本義を求めて

まず、「生」の基本的な用法は何かを考える。 舩山・深田（2003）は、多義語のプロトタイプの意味というものについて、

3. 複数の意味の中で最も基本的な意味のことであり、基本的であるということは、最も確立されていて、認知的際立ちが高く、中立的コンテキストで最も活性化されやすい。(p.142)

と述べている。ここで言われているプロトタイプの意味とは、まさしく基本的な意味、基本義のことである。また、「中立的コンテキスト」というのは、たとえば、「やつ」という語であれば、「やつは来たか」とは言えるが、「\*やつをくれ」とは言えない。つまり、「やつ」は、特別なコンテキストが与えられていない中立的なコンテキストにおいては、「人」という意味で使われ、「モノ」という意味にはならないということである。「やつ」が「人」という意味で使われるときには、用法上の制約がなくなる（あるいは、弱くなる）のに対して、「モノ」の意味で使おうとすると、「モノ」と解釈できるような情報を付加しなければならないわけである。この、「ひと」の意味で使われる「やつ」の用法のように、用

法上の制約の少ない用法を、より基本的な用法である、と認めようということである。

また、「認知的際立ちが高い」ということは、認知的に目立つということであり、「抽象的なものよりは具体的なもの、目に見えないものよりは目に見えるもの、人間でないものよりは人間」(吉村2002: 28)が、それに当たる。

この考え方に従えば、「生」の用法のなかで、認知的な際立ちが高いものは、具体的なモノである①・②のグループということになるだろう。

そこで、まず、①の区分のうちの可食性のあるものについて見てみることにする。①に属する語は、異なり数、延べ数とも、「生」の用例全体の過半を占める。

検討の観点は、次の3つを考えた。( )内は、検討する節の番号である。

- 1) コンテキストからの自由度 (3.1)
- 2) コトガラ把握の全体性 (3.2)
- 3) コトガラ把握の身体性 (3.3)

1) は、上に述べた「中立的コンテキストでの活性化」が「生」の用法でどのように働いているか、2) は「生」という状態を捉える際に想定されているベースがどのようなものか、3) は「生」の認知の基盤が知覚的か概念的かという観点である。2)、3) の観点も、認知的な対象把握の中で、より基本的なものを定めるための、「際立ち」に関わる観点になりうると考えて設定したものである。

### 3.1 コンテキストからの自由度

「生+名詞」という語は、「生の～」 「～は生だ」という形への言い換えが可能な場合とそうでない場合がある。ここでは、この言い換えが意味を変えないかどうかという点で、コンテキストからの自由度を比較する。(用例に付した#は、形態的に可能だが、当の意味にはならないことを示す。) 自然物、製造物について比較し

てみる。

#### 4. 自然物

- a. 生肉 → 生の肉  
この肉は生だ。
- b. 生いか → 生のいか  
このいかは生だ。

#### 5. 製造物

- a. 生ハム → #生のハム  
#このハムは生だ。
- b. 生パスタ → #生のパスタ  
#このパスタは生だ。

4の例のように「生肉、生いか」など自然物の場合は、いずれの形においても、「生」の持つ意味には変化がないと思われるが、5の「生ハム、生パスタ」という製造物になると、「生ハム」と「生のハム」「このハムは生だ」とでは、「生」の意味が変わってくるように思われる。「このパスタは生だ」の「生」は、「生茹で」という意味かどうかコンテキストなしには判断できなくなる。

2の③～⑥の区分についても、「生の～」 「～は生だ」に言い換えると、「生」の意味が変化したり、表現としての許容度が下がったりする。③と⑥の区分の例を挙げる。

- 6 a. (区分③) 生傷 → #?生の傷  
\*この傷は生だ。
- b. (区分⑥) 生中継 → #?生の中継  
??この中継は生だ。

このように考えると、出現環境に制約されずにその意味を実現しているのは、可食自然物に付いた「生」の場合ということになり、形態的な点からは、区分①の用法の基本度は高いといえることができると思われる。

### 3.2 コトガラ把握の全体性——「生きている」と「生」の間

#### 3.2.1 自然物の場合

次に、「生」という語が、生命体の生命のありように関して、どのような段階を指すものかを考えてみる。簡単に言えば、「生」とは、「生きている」ということと同じかということである。

たとえば、「生しらす」については、「まだ生きている生シラスがまずい訳がない。」

(chikyu-no-cocolo.cocolog-nifty.com/blog) というような用例がある。「生しらす」という語に、「生きている」という修飾が付いているということは、「生しらす」は通常は生きていないということの意味するものなのであろう。また、「活生ガキ」(兵庫県浜中水産HP) というような表現もある。このことばが「生きている生ガキ」を表すための語だとすれば、「生がき」は「生きていない」カキを意味するということになる。

つまり、「生」という意味にとっては、「生きている」かどうかはあまり重要ではないということなのかもしれない。だいたいな点は、自然状態にあるものについてではなく、ヒトが食のために捕獲したものについて言われるという点である。そして、捕獲された状態とは、「生きている」状態を離れて、死へ至る不可逆的な過程に入った状態を意味するわけで、この不可逆的な過程の始まりを表す語が「生」なのではないかと思われるのである。図式すれば次のようになる。「…」の部分「生」の状態である。

#### 7. 「生いか」の「生」の位置

生きている状態 「生」 後の状態  
————— | …………… | —————→ t

捕獲される前のシラスは、「シラス」であって、「生シラス」ではないし、海を泳いでいるイカ

は、単に「イカ」であって「生イカ」ではない。捕獲されてはじめて「生しらす、生いか」になるのである。

因みに、7の「後の状態」とは、「生肉、生いか」などの場合には、乾燥、加熱、発酵などのいわゆる調理がなされた状態、あるいは、腐敗状態が考えられる。そして、そのような場合には、いずれも、単に「肉」「いか」という語で呼ばれることになる。

#### 3.2.2 製造物の場合

次に、可食製造物について考える。「生ハム、生パスタ」などである。

これらは、製造されるものであり、「生」より前の状態が自然界に存在するわけではない。さらに、「後の状態」もない。腐敗あるいは乾燥などによって原型を止めなくなっても、「生ハム、生パスタ」は依然として「生ハム、生パスタ」である。これは、「生肉、生いか」などの自然物と異なる点である。このグループでは、可食物の世界に存在していた時間性がなくなっている。そして、時間性を失った代わりに、「生」か「生でない」かという2項対立的な捉え方が成立している。図示すれば、次のようになる。

#### 8. 「生ハム」の「生」の位置

「生」 「生でない」  
| …………… | ————— |

製造物と比較してみると、自然物についての「生」は、捕獲、収穫から乾燥、腐敗などへ至る時間的な変化過程全体を見渡したうえで、そのうちの一つの状態について、「生」と捉えているということがわかる。

### 3.3 コトガラ把握の身体性——「生」と判断する根拠のありか

次に、「生」かどうかをどのように判断されるか、自然物、製造物を比較してみる。

自然物である「生肉、生いか」について「生」とする判断は、目で見る、食べる、嗅ぐなど、知覚によって行われる。「生」かどうかを判断することは、腐敗しているかいないかを見分けることでもあり、いわば生得的に備わった、生存にとって欠かせない能力だとも言える。

それに対して、「生ハム、生パスタ」の「生」は、いわば工業的な基準で決められるものである。生得的なメカニズムによって判断されるものではなく、人為的に定められた基準に照らして判断されるものである。2つほど例を挙げよう。「生餡」「生ビール」とは、どんな「餡」であり「ビール」であるか。

#### 9. 製造物の「生」

生餡 : 小豆を煮てつぶし、皮を除き水気を切った、砂糖を加える前の餡。(コトバンク)

生ビール : 醸造したままで、加熱殺菌をしていないビール。〔『明鏡』〕

「餡」を食べて、それを「生」かどうか判断できるのは、「生餡」がどういう規定によるものかを知っている人である。「生ビール」も同様である。繰り返し摂取するうちに、味覚的に識別できるようになることもあるかもしれないが、それは学習によるものであって、生得的なメカニズムによるものとは異なる。

### 3.4 「生」の基本的用法と定義

ここまで、3つの観点から、「生」の用法を検討した。この3つの観点から見ると、「生肉、生いか」などの可食性のある自然物の「生」は、

製造物と比べて、コンテキストからの自由度がより高く、事柄把握が時間性を持った現実世界の中で行われており、また、事柄把握がより知覚的、身体的であり具体的であるということがわかる。

これらの点を考えあわせると、可食自然物に現れる「生」が、「生」の基本的な用法であることは、それほど強引ではないだろう。2の②～⑥の「生」は、①に見られたコンテキストからの中立性、ものとしての具体性、判断の身体性のいずれか、あるいはすべてが、限定的な形でしか備わっていない。

では、可食自然物の「生」、製造物の「生」はどのような関係にあるのか、意味を記述するとしたらどのように記述できるか。

ここで、簡略化のため、「生肉、生いか」の「生」を「生・自然」、「生ハム、生パスタ」の「生」を「生・製造物」と略称することにする。

「生・自然」は、ここまでの議論をまとめると、次のように書けるだろう。

#### 10. 「生・自然」の意味

自然物で可食性のある生命体について、その生命体あるいは、その一部が生命体から切り離されるなどして、生命を失いつつある状態にあること。加工されていないということは含意であって、表意ではない。

一方、「生・製造物」はどう規定できるか。その前に、「生・製造物」に属するものの規定を、前節の「生ビール」「生餡」以外で、また、国語研ninjalの用例リストで頻度2以上のものについて、さらに見てみる。

#### 11. 「生・製造物」の規定例

生ハム : 塩漬けにして乾燥熟成させた豚肉で、非加熱食肉製品（モンテ

物産HP)

生春巻 : エビや肉、生野菜などをライス  
ペーパーで巻いた料理。名称は、  
油で揚げたり焼いたりしないこ  
とから。(大辞泉)

生パスタ : 乾燥させていないパスタ

生味噌 : 加熱や調味をしていない味噌

生パン粉 : 乾燥していないパンを大まかな  
粉状にほぐし砕いて作るタイプ  
(wikipedia)

生チョコ : チョコレート生地を生クリーム  
や洋酒を練り込み、柔らかい食  
感をつくり出したもの。

(Wikipedia)

「生・製造物」の多くは、非加熱、非乾燥、  
非加工などの工程を経ていないことが明記され  
ている。つまり、1に引用した辞書類の記述の  
ように、「～していない」という形で書かれるタ  
イプの性格を持つものである。このような否定  
形の表現は、その一方に、「生」の付かないモノ  
が存在することを前提としている。「生ハム」な  
ら「ハム」、「生パスタ」なら「パスタ」が存在  
する。つまり、それとの対比で命名されている  
わけで、いわば、2次的な命名法である。

また、「生チョコ」の記述には、加熱や乾燥と  
いう工程が書かれていないが、通常「チョコ  
レート」と比較して柔らかく、加熱などによっ  
て起きる固化した状態にないという意味での  
「生」であろう。

このような事例を総合すると、「生・製造物」  
の意味は次のようになろうか。

## 12. 「生・製造物」の意味

製造物で可食性のあるモノについて、加  
熱、乾燥、調味、固化などの処理を加えて  
いないこと。また、通常、「生ハム」に対

する「ハム」などのように、「生」という  
語のつかないモノが存在する。

## 4. 非可食のモノにとっての「生」(区分②)

### ——非可食物の「生」

非可食自然物のグループには「生木、生竹、  
生草」などが含まれる。これは、切り取った直  
後のもの、あるいは、切り取ったあとの水分を  
失っていない状態のものを言うようである。生  
命のあるものが、生命を失いつつある状態に  
あるということを示す点では、「生いか」などの  
「生」と同じである。違いは、食べられるか食  
べられないか、という点である。

一方、非可食製造物には次のようなものがあ  
る。「生ゴム」は辞書からとったものだが、それ  
以外は、国語研ninjalに採られているものであ  
る。頻度順に挙げる。

## 13. 非可食製造物の用例<sup>註1, 2, 3</sup>

生コン : 凝固する以前の状態のコンクリ  
ート (Wikipediaより)

生鉄 : よく鍛えていない鉄 (『大字泉』)

生テープ : 未使用の磁気テープ。(『明鏡』)

生皮 : はいだばかりで、まだ乾燥 や  
加工のしてない皮。(『大辞泉』)

生ゴム : ゴム植物の樹液に酢酸を加えて  
凝固させたもの (『明鏡』)。加  
硫前の状態のものをいう。(コト  
バンク)

ここでも、「～する以前の」「～していない」  
という表現が共通している。「生竹、生木」と「生  
コン、生鉄」の関係は、①の可食自然物と可食  
製造物の関係と並行的である。

## 5. ヒトの身体と「生」（区分③）——「生傷、生爪」の「生」

次に、1節に挙げた「生傷、生爪」の「生」について考える。「傷」「爪」は、身体に関する語である。近年の用法には「生脚、生顔」など、「生+身体語彙」の形の語が見られるが、1960年代に出版された『岩波国語辞典』に登録されているもので、この形の語は、「生傷、生首、生爪、生身」の4語だけである。このうち、「生傷、生爪」は、たとえば、次のように使われる語である。（下線は筆者）

14. 私はおてんばで、それこそおでこやあごから手足の先まで、まんべんなく生傷の絶えない子でした。かさぶたの上に新しいかさぶたが乗り（…）

(komachi.yomiuri.co.jp)

15. 足の小指の生爪をはがしてしまいました。出血は止まったのですが、このままにしておいて大丈夫でしょうか？ (sooda.jp)

そして、これらの語についての、辞書の記述は次のようなものである。

16. 生傷：新しい傷。〔『明鏡』、『岩波』〕<sup>註4</sup>  
生爪：指に生えているままの爪。(同)

現象としてはこのように記述できる面もあるのだろうが、なぜ、単に「傷」「爪」と言わずに、「生傷」「生爪」と言うのか、その点が捉えられていないように思う。通常の状態では指にあるものを、「生爪」とは言わないだろう。「生爪の手入れをする」とは言わない。

用例14の「生傷」は、できたばかりで治っていない傷、15の「生爪」は、剥がされるものとしての爪である。いずれも、損傷を受けた、あるいは、受けるものという点で、損傷と関係が

ある。つまり、「生」は、通常の状態にある生体が、損傷を受けた／受ける状態へと、不可逆的な過程に入ることを示す語なのではないかと思われるのである。

「生」が、一種の不気味さ、気持ち悪さを感じさせることがあるとすれば、それは、「生」が、「生命体の損傷」あるいは「生命体からの離脱」というような、ヒトの身体の損傷という意味を含んでいるからだろうと思われる。

このような「生」の意味は、可食自然物のところで述べた基本義(10)と、同じような図式の中で捉えることができる。図示すれば、次のようになる。単なる「爪」は「生きている状態」の爪であり、「生爪」はこの図の「生」の位置の爪つまり、「損傷を受けた状態」の爪である。

## 17. 「生傷、生爪」

生きている状態 「生」  
————— | …… | —→ t  
損傷を受けた状態

ただし、ここでは、基本義(10)には存在した「後の状態」がない。それは、「生傷、生爪」という表現には、比喩が介在しているため、損傷状態を示すに不要な「後の状態」の写像が抑制されているのだと思われる。

## 6. ヒトやモノの状態（区分④）——「生ぬるい、生白い」の「生」

次に、「生+形容詞」の形の語について見る。「生+形容詞」形の語彙は限られていて、辞書類に共通してとられている語は、「生ぬるい、生暖かい、生白い」ぐらいである。<sup>註6, 7</sup>

このうち、「生ぬるい、生暖かい」は、中温系の温度形容詞に「生」がついたもので、温度形容詞に「生」がつくのはこの2語のみである。高温、低温系の形容詞には付かない。「\*生暑い、

\*生熱い、\*生寒い、\*生冷たい」などの語はない。「生ぬるい、生暖かい」は、次のように使われている。

18 a. 暖房って生ぬるい風が気持ち悪くて嫌いなんだけど (…)

(twitter.com/kww100/statuses/273497004087324672)

b. 身体が本来持っている熱さえも、生ぬるくて気持ちが悪かった。

(perfectism.web.fc2.com/gw/novel02.html)

19 a. 口に入れた瞬間、生あたたかい、ねちょとした食感で非常に不快でした。

(tabelog.com)

b. 生暖かい風が吹いてきて、気持ち悪い夜でした。

(nigashitasakana.naturum.ne.jp/e1311374.html)

この用例からみると、「生ぬるい、生あたたかい」という感覚は、不快さを伴うものようである。「気持ち悪い」「不快」ということばと共に使われることが多い。「ぬるい」ということば自体、適温ではない温度を意味するが、「生」はそれに不快さを加えるわけである。また、「ぬるい」という語は、通常は、液体の温度表現に使われるものであるが、「生ぬるい」になると、そのような制約はなくなり、「暖房」「体温」などについても、その不快な温度感覚を表現する語として使われるようである。「あたたかい」は、心地よさを表す語であるといわれる(国広1984)が、「生あたたかい」は、不快さを持った温度感覚を表すように思われる。『明鏡』は、「生ぬるい」について、「不快な暖かさ」という記述をしているが、この稿での分析と軌を一にするものである。

「生」のこのような不快感の由来は、やはり、「生」という語の持つ意味の中核にあるのではないだろうか。それは、先述したように、生命体が、生命を失いつつある状態、あるいは生命体そのものの気味悪さに通じるものではないかと思われる。したがって、次のような記述は十分ではないと言えるだろう。

20. 生あたたかい: なんとなく暖かい。(『岩波』、『明鏡』)

「生あたたかい」も、「生ぬるい」と並行的に扱うことが検討されて、不快さ、気味悪さという意味合いの記述が加えられてもいいと思われる。

この不快さ、気味悪さという感覚については、「生白い」についても言える。肌の色の表現として、「色白」「肌が白い」という表現なら、通常は、否定的な含意を持たないだろう。しかし、「生白い」という表現は、「病み上がりのなまっしろい顔」(『明鏡』)というように、病的な白さを含意することがある。白さが、不健康さなど、生体の状態が順調ではないことを含意する。病気というのは、生体が直接意識の対象となる状態であり、一種不気味な状態である。そのような感覚を「生白い」は表現しているように思われる。

## 7. 状態を表す語につく「生」(区分⑤)<sup>注7</sup>

もうひとつ、いわば、旧来の用法とも言うべき「生」の用法がある。区分⑤である。用例を追加して再掲すると、次のようなものである。

### ⑤ヒト、ヒトの活動(1)

- 1 モノゴト 生焼け、生煮え、生茹で
- 2 知識・技術 生兵法、生学問、生返事
- 3 ヒト 生意気、生半可

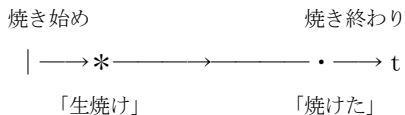


## 7.1 「生焼け、生兵法」などの「生」

この節では、「生焼け」、「生学問」などの「生」の用法を検討する。

まず、「生焼け」であるが、同種の語として「生煮え、生兵法、生意気」などの語がある。これらの語に共通する特徴として、時間に伴って変化する段階が想定されているということが指摘できよう。これは、7、8、17などの図式、捉え方いづれとも異なるものである。「生焼け」を例に図示すれば、次のようになる。

### 21. 「生焼け」の「生」の位置



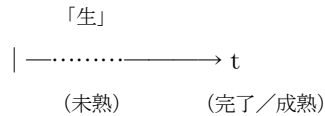
「生」は、対象が「焼けた」という完了状態に至る途中の段階（図の\*）にあることを示すものである。「半焼け」という語でも表しうる状態である。「生+動詞連用形」の形をとる語は、ほとんどが調理用語であるが、意味の点では、未完了状態という点で共通している。調理用語以外では、「生殺し」があるが、「生」の意味は同じである。

これに対して、「生兵法、生学問、生返事」などのグループは、過程の途中にあることを意味するという点では共通しているが、具体的な“完了状態”は想定しにくいものである。

「生兵法、生学問」は、知識や技術が中途半端な状態にあること、「生返事」はその返事が誠実さを欠いた中途半端な返事であることを表すが、これらの「生」が“中途半端さ”を表すということは、対象となるモノゴトには期待される度合い、あるいは、状態があり、「生」は、その状態に至っていないことを表すということになるだろう。<sup>註8</sup>しかし、そこで期待される状態は、具体的に示される性質のものではない。こ

こにあるのは、期待される状態に向かって成熟していく、一種の終点のない成長モデルである。図式化すれば次のようになる。この「生」は、21の図式と同種の捉え方と見ることができる。

### 22. 「生兵法」の「生」



## 7.2 「生焼け、生学問」の「生」の派生過程

では、これら21、22に示したモデルと、「生肉、生いか」などの基本的「生」モデル7とはどう整合するのか。

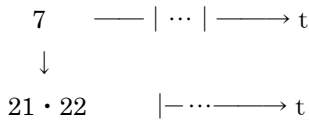
共通点は、「生」という状態が、初期状態から最終状態へと変化をしていく過程の途中にあると捉えられている点である。

異なりは、「生肉」などの基本義では、「生」と「生」以前・以後では、質的に異なるものへの変化と捉えられていたのに対し、「生焼け」「生兵法」では、変化が連続的なものと捉えられている点であろう。基本義(7)が離散的变化をイメージするのに対し、派生義(21、22)は、連続的变化をイメージさせる。

7のモデルの「後の段階」、これが、「生焼け」に関わる過程の全体にあたり、その初期状態を「生」と呼んでいるわけである。このような把握の仕方は基本義の持つ「生きている→『生』→後の状態」というプロセスのうちの『生』→後の状態」という2つの段階を、新たに、「開始以前→開始→完成」という3つの段階へ解釈しなおすことによって成立したものではないかと思われる。

図式的に示せば、7から21、22への変化は、次のように示すことができるだろう。

23. 基本義 7 から派生義 21・22 へ



### 8. 「直接性」表現の「生」（区分⑥）

用法の検討の最後に、近年広がりつつある「生」の用法を検討する。

#### 8.1 「生中継、生放送」の「生」

##### 8.1.1 「生中継、生放送」の「生」の意味

まず、「生中継、生放送」であるが、これらは、放送に関することばが多い点が目立つ点であるが、また、サ変動詞語幹になるということでも特徴的な語群である。

これらの語のうち、たとえば、「生中継」の意味について辞書では次のように記述されている。

24. 生中継：ラジオ・テレビなどで、録音や録画ではなく、現場から直接、その状況を中継放送すること。（『明鏡』）

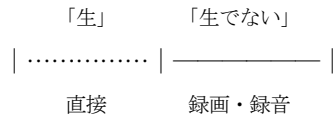
この記述のうち、「録音や録画ではなく」という部分は、「～していない」ということで、2の区分①・②のモノに関する「生」の記述を引き継ぐものであるが、だいじなところは、「現場から直接中継放送をする」という部分の「直接」というところだと思われる。「生中継」にとどまらず、「生演奏」「生放送」いずれも、「直接」という意味をもっており、「生」は、ここに至って、「直接」性という性質を表現するようになったからである。

##### 8.1.2 「生中継」の「生」の派生過程

「直接」という意味が現れたのは、「放送、中継、演奏」などの語あるいは概念と結びついたからだろうと思われる。

これらは、テレビ、ラジオなどの用語である。放送に際しては、録音、録画、編集などの「加工」が行われる場合もあれば、そうでない場合もある。そのような「加工」をせずに、「放送、中継、演奏」が行われることが「生」と呼ばれているわけで、これは、「生+加工」というモノについての「生」の用法のメタファーになっている。これを図示すると、次のようになる。これは、8で示した「生」の意味がより抽象化されたものと見るができる。8の図式を使えば、次のように表せる。

##### 25. 「直接」の意味のあり方



ここでの「直接」という意味は、写像のターゲット領域である放送技術の構造を反映したものであるが、ここで獲得された「直接」という意味は、放送領域を離れて、別のところにも適用されることになる。

#### 8.2 「生原稿、生データ」の「生」

「直接」の意味が他領域に転用されたものの一つが、活動の産物につく「生」である。「生データ、生原稿」など。これも「加工されていない」ということを意味するが、この場合は、計算、編集、印刷などの、技術的な加工をされていないという意味である。

#### 8.3 「生オバマ、生力士」の「生」

さらに、「生オバマ、生力士」のような用法がある。「生オバマ、生力士」とは、直接目にした「オバマ大統領」であり、「力士」のことである。普段はテレビなどの媒体を通してみているモノを、直接に見たときに「生～」と言われるよう

である。これも、放送などの媒体の発達を前提とした表現であり、「生でない」ものの存在が前提となった表現である。毎日直接会う職場の同僚について、「生〇〇さん」とは言わない。

#### 8.4 露出される身体

また、「生脚、生腕、生膝」などの表現も、直接性の表現を目ざした用法である。普段は露出されないものが、露出しているときに使われる表現のようである。しかし、「??生肘、??生踝」などという表現はないようでもある。単に露出性だけが焦点になっているのではなく、生体としての生々しさが感じられる身体部分について言われるのではないかと思われる。「直接」という意味を持つ点では、区分⑥「生中継」などのグループに入るが、「生々しさ」を持つという点では、6節に挙げた区分④「生白い」などの意味も引き継いでいるものと言えよう。

8.1～8.4の「生」は、全体として見ると、「生：加工」という対立の図式で物事を捉えようとする点で、「生ハム」などの「生」と同系であることができる。つまり、「生いか、生肉」の基本義グループと、「生焼け」などの変化スケールを持つグループとは別の系統ということになる。

### 9. おわりに

#### 9.1 まとめ

1節に、本稿の目的として3つのことを挙げた。

ひとつ目は、「生」の基本的な用法と基本義を求めることだったが、この稿では、コンテキストからの自由度の高さ、事柄把握のベースの全体性、また、事柄把握の具体性・身体性という点から、自然可食物につく「生」の用法を基本的な用法とし、次のような基本義を設定した。

#### 10. 「生」の基本義（再掲）

自然物で可食性のある生命体について、その生命体あるいは、その一部が生命体から切り離されるなどして、生命を失いつつある状態にあることを指す。加工されていないということは含意であって、表意ではない。

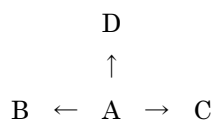
二つ目の目的は、複数の用法間の関係を整理することであった。まず、「生」の用法の系統として、26に示すように、基本義Aのほか、B～Dの3の系を取り出した。B～Dに、仮に名称を与えるとすれば、「生体損傷」型、「加工：非加工」型、「成長モデル」型の3つである。2に挙げた区分を付して示す。

#### 26. 「生」の意味グループ

- A 基本義 (①)
- B 「生体損傷」型 (③、④)
- C 「成長モデル」型 (⑤)
- D 「加工：非加工」型 (②、⑥)

また、三つ目の目的は、これら諸用法の派生関係を捉えるということだったが、本文での記述に沿って図式的に示すと、次のように整理されると思われる。

#### 27. 意味派生の関係の概観



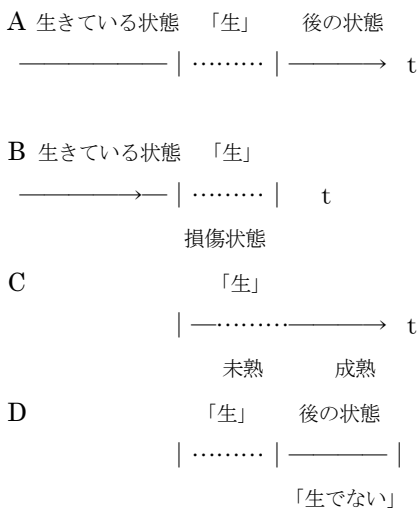
3つの派生系統の特徴を簡単に言えば、次のように言えるだろう。まず、B。これは、「生きている」状態から「生」へと至る、生命状態の変化を捉える「生」である。次にC。これは、「生」の持つ時間性を背景に、ことがらを成熟するも

のとして捉える図式である。最後のD。ここには時間性はなく、「生か生でないか」という対立によってモノゴトを捉える認識図式の派生である。

### 9.2 「生」の用法の派生と「料理の三角形」

「生」の意味について、基本義と3つの派生タイプを区別した。前節のA~Dの区分について、図式だけ再掲すると次のようになる。

#### 28. 「生」の基本義と派生義の図式

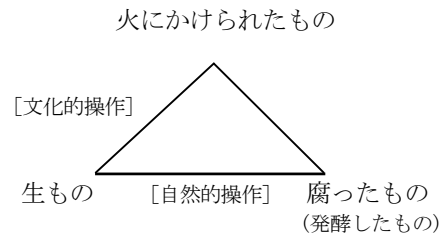


このように並べてみると、B~Dは、いずれもAの意味を部分的に利用して、成立していることが見て取れる。その点でも、Aが派生の起点になっていることが理解される。

では、このような派生は、個々ばらばらに成立したものなのか。AからB~D3つの方向への派生の全体を統括するようなものはあるのか。なぜ、この3つの方向になったのか。この節では、「生」の派生全体の枠組みが何によるのか、という問題を考えてみようと思う。

このことを考える上で参考になるのは、レヴィ＝ストロース(1980)の「料理の三角形」である。それは次のようなものである。

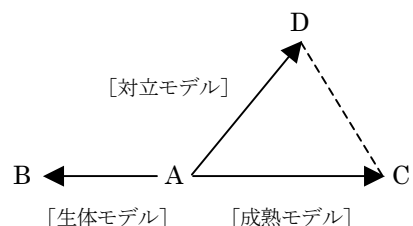
#### 29. 「料理の三角形」(レヴィ＝ストロース、1980: 61)



この稿にとって重要な点は、「生(生もの)」に対する操作が、2つの方向にまとめられている点である。「自然」と「文化」という概念で捉えられている点である。レヴィ＝ストロースの説明には理解しにくい点もあるが、ここでは、「火にかける」という処理を文化側のものとし、「腐敗・発酵」に至る過程を自然側の変化と見ることにする。文化的な操作とは、より人為的な操作ということであり、自然的操作とは人為を加えない、自然の推移に委ねるということである。

このモデルを利用すると、27に示したA~Dの関係は、次のように書き換えることができる。「文化的な操作」はA-Cに対応して「対立モデル」、「自然的な変化」はA-Dに対応して「成熟モデル」、それに、「料理」以前であるA-Bの「生体モデル」が加わることになる。

#### 30. 「生」の意味派生の全体



この図の、Aを中心とした3つの方向の性格は次のようなものである。

A-Cは、時間的推移の中でのものごとを捉える

「生」である。時間性を持つということは時間とともに変容するということであり、その結果は「成熟」である。このようなモノゴトの捉え方の中での「生」は、「未熟、未完成」を意味する。

A - Dは、2項対立的にモノゴトを捉える「生」である。時間性はない。ものごとを「生か生でないか」、つまり、「XかXでないか」という観点で捉える用法である。「生」かどうかの判断は、文化的な基準に依存する。

このA - C、A - Dの広がりには、「料理の三角形」に対応するものである。

それに対して、A - Bは、その外側にある。それは、Bの「生」が、捕獲されて間もなくの状態、つまり、料理以前の段階にあるからである。この段階は、生命が不完全な形で残存している状態を焦点化したものである。

このように、「料理の三角形」という観点を取り入れて「生」の用法を見てみると、A・C・Dという料理にかかわるグループ、A・Bという食以前の収穫・捕獲にかかわるグループの、2つのグループに大別されることになる。逆に言えば、「生」の用法の派生は、この2つのグループに制約されることになる。つまり、27に示した枠が、「生」の用法の広がり限界なのではないかと思われるのである。

### 9.3 おわりに

「生」という語に、将来、新たな用法が生まれるかもしれないが、もしそうだとすると、それは、この枠の中の要素のメタファー、メトニミーなどとして成立するもので、基盤としてのこの図式を離れることはないのではないか、それがこの稿の予想である。つまり、意味・用法の広がりは無限定なものではなく、その限定を加えるのは、われわれが経験を通して獲得した心的なイメージではないかということであ

る。そのようなイメージが整理されたもの、抽象されたものが認識の基盤となり、ことばの派生を支えているのではないか。

また、「生」の派生を見てくると、用法の派生が偶然的で恣意的なものではなく、われわれヒトというものの社会文化的な基本的な行動、生存のための基本的な技術、知識という枠組みの中で行われていることが感じられる。その枠組みのどの部分をどう使うかということに関しては、一定の動機づけが存在するかもしれないが、いずれにしても、大きな枠はあらかじめ決まっているといことになるのではないだろうか。その一つが、この「料理の三角形」なのではないか。レヴィ＝ストロースが提案した「料理の三角形」は、料理にかかわる事象を捉えるために作られたモデルにすぎないと言えればそれはそうなのであるが、われわれの経験をまとめるスキーマを近似的に捉えたものとなっているのではないかとも思われるのである。そして、それは、われわれの経験、文化的構造をよく捉えているがゆえに、物事の把握のために使い勝手の良い鋳型としても、機能するものとなっているのではないか。

ただし、これらはいくまでも「生」の観察から得られた予想であって、他のことばについてもこのような予想が成り立つかを検討しなければならない。また、ヒトとしての経験を基盤とするならば、他言語でも同様の現われをする可能性があるが、その点についても確かめる必要がある。今後の課題としたい。

## <注>

- 1 この区分には、非可食製造物という点では、「生ワクチン」が含まれると考えられるが、「生ワクチン」とは、「毒性の弱い生きたままの細菌やウイルスを含むワクチン」(大辞泉)であり、「生きている」ということを、「生」で表している。また、「生菌」(読みとしてはセイキンもある)も「生きたままの菌」のことである。これらは、医学分野での用語であり、例外的なものとして扱ってよいのか、現段階ではわからない。この稿では、考察の外におくことにする。
- 2 国語研ninjalには「生CD」という語も「生テープ」と同じ頻度で現れるとされているが、この「生CD」は、2つの意味があるようである。ひとつは、「未使用のCD」ということであるが、もうひとつ、「コンピュータなどを通して聴くということを経ずに、直接プレーヤーにかけて聴く」という意味で使われている例が、インターネット上にあった。一般的な用法であるかはわからないが、ここでは用法が特定できなかったため、取り上げなかった。
- 3 「生ごみ」は、国語研ninjalの「生+名詞」の項で、頻度が最も高い語である。「生ごみ」は、非可食で、ヒトの活動に伴って作られるものであるという点で、この類の基準に該当しそうであるが、この稿では、「生ものから出たごみ」という表現から派生した一種の短縮後と考え、検討の対象とはしないことにした。
- 4 辞書類の中では、『大辞泉』の「生傷」の項に、「なまなましい傷」という説明があるのが注目される。
- 5 なお、「生易しい」という語もあるが、この語は、否定述語と一体となって「簡単ではない」ということを意味するようになっており、「生」の意味を取り出すことがむずかしい。ここでは考察の対象から除く。
- 6 かつては、「生+形容詞」は少なからず存在したようである。たとえば、「なまあらあらし」「なまおそろし」「なまさかし」「なまはしたなし」などがある(『全訳古語辞典改訂版』)。
- 7 いくつかの辞書には、今でも、「生女房、生侍」の語が立項されている(『岩波国語辞典第二版』、『大辞泉』)。そして、「生女房」については「なりたての女房」、「生侍」については「身分の低い侍」という説明が付けられている。この説明が妥当であるとすれば、「生女房=女房というものになりきっていない女房」、「生侍=侍らしくない侍」というように解釈することもできる。とすれば、「生女房、生侍」の「生」は、対象の「成熟、成長」を基盤としたスケールを背景としていると考えることができそうである。

これは、自然に流れる時間の中での未熟段階を「生」と言っているわけ、「生肉、生いか」とも違うスケールの設定の仕方である。

しかし、「生女房、生侍」という語について、筆者は直感が働かない。そのため、辞書の語義説明を前提に議論しなければならなくなる。そのために、意味の議論を避けるのであれば、直感の働かない語の意味は永遠に問題にできなくなってしまうが、今のところ、この問題をクリアする方法を持ち合わせていない。ここでは、これらの語についての議論は、保留しておくことにしたい。

- 8 「生意気」は、「自分の能力や年齢をわきまえずに出すぎた言動をすること」(『明鏡』)とされる。この語は、1語化しており、分析的に「生」の意味が捉えられることはないかもしれない。あえて語源を遡れば、「意気」は「心意気」という意味であり、そこに「生」が付き、「心意気は一人前だが、能力や年齢は未熟」ということになるだろうか。「生半可」も、「生半可通」=「よく知りもしないのに知ったかぶりをする人」に「生」が付き、「中途半端な知識を振り回す状態」というような意味を持つようになったものと思われる。

## <参考文献>

### (辞書類)

- 北原保雄編 (2010) 『明鏡国語辞典第二版』大修館書店  
西尾実・岩淵悦太郎・水谷静雄編 (1967) 『岩波国語辞典第二版』岩波書店  
森田良行 (1984) 『基礎日本語辞典』角川書店

### (単行本)

- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』大修館書店  
辻幸夫編 (2002) 『認知言語学キーワード事典』研究社  
初山洋介・深田智 (2003) 「多義性」(松本曜編『シリーズ認知言語学入門3 認知意味論』4章、大修館書店)  
レヴィ=ストロース,C. (1980) 『レヴィ=ストロースの世界』(伊藤晃他訳) みすず書房